

話題満載ソウル地下鉄譚

前川 恵 司

ソウルの地下鉄に乗っていると、本を読んでいるように、お構いなしにいきなり物を膝の上に置かれることがある。見上げると、見知らぬ人が、隣の客の膝にも同じものを配っている。一通り、車内の客に渡し終えると、やおら口上を一新さるだ。

「これは、ただのスカーフじゃないよ。こうやって首に巻けばマフラー。頭にかぶれば帽子。夏にはこうしてバンダナ代わりに使って、汗も落ちない優れたものヨ」

「百貨店で買えば、黙って3万ウォン(約3000円)取られるものが、ただの5千ウォンだ」

地下鉄の車内をお店代わりにして、囁れ声で、ウソか本当か、聞こえるか聞こえないかの声でしゃべるのがミソの物売りたちだ。商魂たくましい、この風景は韓国にあって、日本にはないものの一つであるには、違いあるまい。

売り物は、時計からボールペン、それに狭い場所でも、縦にも横にも何枚も吊るせるハンガーや電池式の肩たたきなど、結構役に立つアイデア商品など様々だ。買いたくなければ、膝の上に載せたままにしておけばいい。気に入れば売り物の回収に来たときに代金を渡す。

尋常でない、朝のぎゅうぎゅう詰めラッシュが一段落したのんびりした昼前ひとときの地下鉄の風物詩ともいえるが、物売り男たちのほとんどが中年を越えたか、越えないかでジャンパーやシャツ姿がほとんど。たまに背広でピシッと決めた人もいる。背広に気を取られたせいか、その人が何を売っていたか今でも思い出せない。

この物売りと乗客との騒動を目の当たりにしたのは、一昨年のことだ。

韓国最初の地下鉄である1号線で、ソウルから、カルビがおいしいことで有名な水原という近郊都市に行く途中だった。

真向いの座席の、ドアのそばにサングラスをかけた30代前半の男性が座っていた。濃い緑のセーターに黒いベストを着こみ、ヴェイクトンのクラッチバッグを抱えていた。何となくインテリ臭いような、左派がかつているような……。それでいて定職があるのかどうかさえ、判別がつかかねた。

その時、「角質足袋」と書いた箱の山を積んだ買い物カートをガラガラと引っ張った男が、後ろの車両から移ってきた。紺と白の

薄っぺらなジャンパーに黒ズボン、茶色の革靴の物売りで、サングラスの男の膝の上に売り物を置こうとするや、男がいきなり、「うるさい」と立ち上がると、

「ここで何をしているんだ。やめろ」

と、すごい剣幕で食ってかかった。にらみ合いと言いが合いが、2、3分続いただろうか。物売りは、ぶつぶつ言いながら、前の車両に移って行った。おかげで、「角質足袋」が、どんなものか分からずじまいだったが、30代の男は、それでも腹の虫がおさまらなかつたらしい。いきなり、連結ドアのあたりに行くと、インターフォンで、車掌に、「とんでもない奴がいたぞ」

と、猛烈な抗議を始めた。日本の地下鉄に乗客と車掌を結ぶ、この手のホットラインがあるかどうか。とすると、これも韓国にあって、日本にないもの一つなのか。

それはともかく、すぐすぐ目の前を通り過ぎた物売りは、ひらひらした右袖をそのままポケットに突こんで、右腕がないのを隠していた。身体障害者だったのだ。実は、地下鉄の車内は、体が不自由など、一部の「弱者」の「稼ぎ場」でもあるようだ。

カセットラジオの音楽をガンガン流しながら、目を閉じ、杖を突いて乗客の間を通り過ぎていく人がいる。手には募金箱。これは、おばちゃんが多い。ガムを片手に売って歩く人も。若い人が多い。ちよつと目を背けた

くなるのは、ゴムのズボンと胸当てを着こんで、不自由な体で床を這いずり回りながら、寄付を集める姿だ。明洞などの繁華街でも目にするところがある。

ある時、偶然、この人たちが、ライトバンに乗り込むところを見てしまった。ライトバンには、すでに何人も男たちが乗っついていて、「親方」らしい屈強な男が、横抱きにして乗せていた。

ふと、子供のころに東京の繁華街の街角によく立っていた傷痕軍人の姿をおもいだした。軍帽に白衣姿で、首から募金箱を吊り、腕のない肩や膝を見せ、アコーデイオンやハーモニカで「異国の丘」を弾いていた男たち。かわいそうでいて、生々しい義足が怖かった。

この人たちの中に多くの在日韓国・朝鮮人がいることを伝えたのが、亡くなった大島渚監督のテレビドキュメンタリー、「消えた皇軍」だ。ただし、朝鮮戦争のあった韓国で、街頭に立つ傷痕軍人を見た記憶は、私にはない。

韓国の地下鉄では、ドアのわきにベタベタ貼った金貨しの葉書の半分ぐらいのピラも目につく。しばらくすると、はがし男が必ず来る。貼り放しでないあたりが、地下鉄側とのあうんの呼吸になっているのかも知れない。

布教活動をする客もいる。ぱっと、目が合うと「信じる者は天国に。信じない奴は地獄」とやられる。戦国武将さながら、派手な職のようなものを背中に着けている猛者もいる。

概して、韓国人は派手好きだ。奇抜好きな面が強いともいえる。やはり、競争社会の一断面

かとも思うが、なんでもかんでもが乗り込んできて、それはそれで興味が尽きない地下鉄の様子について、一昔前、韓国の知識人から、

「ほかの乗客の迷惑を考えないのも、李朝 5 百年を通し、市民意識が育たなかったし、育てようとしなかったから。そこが、市民意識に支えられた、堺のような商業都市を持った日本との違い。その表れですよ」という見方を聞いたことがある。村社会の

あけっぴろげと凶々しさ、それに情がからまって、今日もソウルの地下鉄は「商売」「商売」で賑やかなのだ。

地下鉄だけではない。バスにも物売りが乗り込んで来ることがあった。この人たちが運賃を払っているのを見たことがない。渋滞の道路では、道端からおばちゃんが飛んできて、スルメやミカンを売りつけに来る。ミカンと言えば、バスで隣に座った見知らぬおばあちゃんが、自分の買ったミカンを、「食べなさいよ」とくれた。

地方都市で名所巡りの観光バスに乗り、昼食の食堂で、山菜ビビンバを食べていると、川魚山菜定食を頼んだ同乗の二人組が、盛んに一緒に食べようと誘ってくれた。韓国のその手の定食は、ご存知のおかずだけでも、山のように出る。お蔭で、腹十分目になった。

戦前に日本に留学した韓国の元首相、姜英勲さんが、

「日本に着いて乗った汽車の中で、生まれて初めてサイダーというものを、隣の席の人からいただいた。何しろ飲み方が分からなく

て、ストローで吸い込むところを逆に息を吹き込んだので、泡があふれて……」

と、いつか話していた。日本ではもはやあまり見られないそんな、通りすがりもの同士のおすそ分けが、いまでも当たり前なのも韓国なのだ。

乗り物話のついでで恐縮だが、釜山へも高速バスで行く。フランスから技術導入した韓国の新幹線、KTXには乗らない。KTXが信用できないからだ。

今年 3 月の日経新聞に、KTX 事故が結構起きていることで、韓国政府高官が、「なぜフランスにしたのだろう」とため息つき、国の顔である高速鉄道を、歴史問題を抱える日本製にするわけにいかなかったから、と仏製採択の背景を説明していた。実際の背景は少し違う。入札当時、日本側が工事参加に尻込みし続けたのだ。それには、日本が全面的に協力した、ソウル地下鉄 1 号線建設工事で起きた問題が絡んでいた。

「韓国側が、あるカーブ箇所での日本の設計図を無視して、強引に設計を変えた工事をしたのです。案の定、完成後に事故が起きました。すると韓国側は、日本の責任だと大騒ぎしました。それを実体験した人が、入札時に JR にまだ勤めていて、韓国版新幹線を受注して同じことが繰り返されたら一大事だ、日本の誇りにとんでもない傷がつくと反対して、表向きはともかく、日本はこの件からは逃げまくったのです」

ソウルの地下鉄は、ともかく話題豊富だ。(まえかわけいじ・ジャーナリスト)